
ネカマな僕とかっこよすぎる彼氏な彼女

アリス法式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネカマな僕とかっこよすぎる彼氏な彼女

【Nコード】

N5202Z

【作者名】

アリス法式

【あらすじ】

並行型思考ネットワーク＜ダイヤグラム＞が普及した時代、僕らはそこにいたくダイヤグラム＞の性能を遺憾なく発揮したVRMMORPG＜ログセリオン＞の世界に。

とか何とか小難しい話はおいておいて、ネカマな僕とカッコイイ彼女、そんな二人のほのぼのオンラインライフです、適当だなおい。

そんな、お話を書いていくつもりのような気がする。

更新は不定期！
以上。

いちわー 僕の彼氏はカッコイイ（前書き）

書いてしまいました。

やってしまいました。

腹切って死ねばいいですか、はいわかります。

いちわー 僕の彼氏はカッコイイ

ーログインー

まどろみを越えて、ゆっくりと景色が変わる。

ログ・センソラル社によって作られた平行思考型ネットワーク＜ダイアグラム＜

既存のサーバーに依存せず。

人の思考、脳その物がひとつの端末として機能する、そんな理論の元作り上げられた＞ダイアグラム＜は急速に人類に普及して言った。

まだ、サーバーとの完全な隔絶は成功していないが、人間の自律神経を読み取るプロセスを組み込んだ小型の端末を使うことによって、画面ではなく思考、そして一人一人の視覚にネットワークを映し出す、刻み込むことが可能になった世界。

そんな、卵形のカプセルにこもらなくても気軽に視覚をネットワークに依存させることができた世界で、ネットゲームが発展を遂げない理由は無かった。

その神経まで、ネットに依存させることによって実現した、完全なるVPMMO。

そこに、人類がはまり込んでしまったのは当然の話だったのかもしれない。

五感すべてを働かせ、風を感じ、食を感じ、あこがれた世界で時を過ごす。

そして、僕もその住人の一人である。

僕こと、神崎^{かんざき} 命^{みこと}16歳のセントラル学園の高等部の一年生だ。

セントラル高校、その名のとおり、ログ・セントラル社が社会貢献の一環として作り上げたマンモス校で学業カリキュラムの一環として。

午後からの授業はログ・セントラル社が作り上げたβ版VRMMORPG「ログセリオン」の世界で過ごすことなどといった特殊な面もあるが、基本はほかの学校と変わらないところである。

まあ、β版云々としては被験者の数を確保するのが楽だからといったのがもっぱらの噂だが。

僕達としても、学校で、授業ではなくしかもゲームがやり放題と言うのだから願ったりかなったたりである。

いまでは、β版の試験も済み、今日から本営業に入るのだが、本営業にはいるに当たって、β版に無かった機能が何個か加えられているというので、いま僕はそれを実験中である。

確認したところ、一つ目は、β版には無かった、生態情報の取り込みができるらしい。

生態情報つまり、身長や顔の造詣などを現実の自分ベースで作ることができるとのこと。

二つ目は、何個か新しい職業の追加、β版は剣士や魔法使いなど大雑把な職業しか無かったので、マニアックな路線を付き進みたいプレイヤー達には受けているようだ。

ちなみに、もちろんだがβ版からのキャラの移行は可能である。

β版ゆえにキャラの育成上限は50レベルと低めに設定されているが、それでもたくさんのバグと戦いながら本営業までこじつけたのは学生達の功績も少なくないといってもいいはずだ、これ位の報酬は無いと悲しいよね。

と、昨日学園の講堂で行われた、本営業万歳報告でめがねをかけた地味な生徒会長が言っていました。

とりあえず、思考ディスプレイの中に自分のキャラの3Dモデルを映し出す。

身長は156センチほど、青い髪に大き目のめがねをかけた地味娘な魔法使い、これが僕が作り上げたキャラだ。

実をいうとこれは、自分の顔に似せて作っているので、スキャンしなくてもあまり変わらない。

ここ笑うところじゃないよ。

っと、でも身長はちよつと伸びるかな。

流石に160はありますよ、ふん。

スキャンを開始して、出来上がった3Dモデルを違和感が無いように元のキャラモデルにかぶせて行く。

おし。ちよつと身長が伸びたぜ！

出来上がったのは、身長が160センチほどになった蒼髪の魔法使いの少女、

あれ、顔もちゃんとかぶせたはずなんだけどな？

どう見ても、蒼髪のめがねをかけた少女がそこにいる、はいはい、女顔ですよ！

プライバシー保護のためのめがねをかけてっと。

はい完成、蒼髪地味な魔法使いです、実はネカマな僕のせいで、β版から女の子設定です。

まあ、そういう人間ばかりが集まっている学園でもあるので、特に珍しくも無いんだけどね。

β版では「ネカマによる、ネカマのための、ギルド」なんてふざけた奴らもいたくらいだし。

さてと、キャラはできたし行きますか。

僕の相方でもある、誰よりもカッコイイ男の娘なだんな様に会いに。

— ログイン コンテニュー —

いちわー 僕の彼氏はカッコイイ(後書き)

グハ

ち、血だ

ばた！

にわー 私の可愛いネカマな彼女（前書き）

やっちゃまった物はしょうが無いよね。

まあ、兄勇妹魔の邪魔にならない程度に書いて行きます。

にわー 私の可愛いネカマな彼女

ふう、

と一息つくと、私こと宮崎風花みやざき ふうかはこった肩のコリをほぐすように腕を回す。

現在いる場所は、生徒会室、その大きなイスにゆつくりと力を抜きながら腰をかけていく、いまは、野暮ったいめがねは外しており、親友などからは、風花はめがねを外せばかっこいいのといわれる風貌を惜しみなくさらしている。

しかし、仮にも女の子だカッコいいというほめ言葉はどうかと思うんだ、と、考えながら、その腰まである長い髪をポニーテールに結び上げていく。

さて、今日からは本営業か、忙しくなるな。

ほかの生徒会役員はもう、それぞれの委員会を従えて、「ログセリオン」内の警備や、初心者に対するマナーの講習、まあ、チュートリアルともいうが、などにはいつているだろう。

私も、管理者権限として与えられている、GMキャラをもっているくらいだしな。

まあ、忙しいの二三日だとたかをくくってはいるのだが、さつき退出していった風紀委員長が提出していった「本営業においての人口の推移」と書かれた報告書には予想の倍を上回るほどの一般プレイヤーが登録している事例を出している。

「ふう、これはしばらくフウカに会いに行けないかな」

名前が、一緒だということで仲良くなった、蒼髪の魔法少女の姿を思い浮かべながら、さっさと仕事を終わらせるために私はめがねをかけた。

「さっさと終わらせて遊びに行こう」

彼女のことだきつとまってくれているだろう、いや、本営業は生態情報を取り込めるそうだから彼になるのかな？

まあ、ネカマな彼女のことだきつとそのままだろう。

などなど、笑みを浮かべながら、私は仕事を片付けていった。

はあ、なぜ重要な書類はまだ紙媒体なのだ？

と、ため息を吐きながら。

大体の仕事が片付いたのは、8時を回るころだった。

さて、私も行くとするか。

結った髪をといて、また、めがねを外す、173センチという女子にしてはなかなか大きい身長をゆっくりとイスに横たわらせてリラ

ックスする。

ーログインー

視界が、軽くホワイトアウトしてから、目の前に『ログセリオン』の文字が浮かび上がる。

そして、キャラ設定の画面を開くとキャラが二つ浮かび上がった、GM用のキャラと、私に似せた男キャラなぜかっこいいと言われてしまうので、意地になって思わず男キャラを作ってしまったのだが、それはいまはおいておこう。

キャラ名 みこと

みことの3Dモデルを確認しながら、ほかの生徒と同じように、自分の生態情報をスキャンしてみこととかぶせていく、うん、ほとんど変わらなかった。

それによって黒に戻ってしまった髪の色を白に変更して、もう一度、みことの3Dモデルを上からしたまで眺めていく。

少し釣り目な瞳と、中性的な顔立ち、身長は同じく173センチだ。

レベルは50、髪は白、鎧も合わせて白で統一している。

はあ、自分ながら、ゲームキャラにするとなぜカッコイイのだ、と悩みながらも。

さて、彼女に会いに行こうかと気持ちを切り替える。

なぜか、めっちゃくちゃ可愛いネカマな魔法少女の元までいこうか。

ーログセリオン コンテニューー

にわー 私の可愛いネカマな彼女（後書き）

はい、投下終了。

気が向いたら、書きますよ。

さんわー ネカマな僕と幼女になった店長さん（前書き）

さんわーです。

頭がこっちに向いてるうちに書いてしまいました。

さんわー ネカマな僕と幼女になった店長さん

ーログインー

一瞬のホワイトアウトの後、目を上げると、そこには懐かしい光景が広がっていた。

始まりの町「アレクセイ」、フィールドにでるためのゲートを中央にすえて、放射線状に街道が伸びその道に沿って町並みがある。

そして、そのゲートがある中央広場はいま現在、数多くの初心者プレイヤーによって埋め尽くされていた。

中には、初心者プレイヤーに安く物を売っている学生プレイヤーの姿や、チュートリアルを行っている風紀委員のGMプレイヤーの姿もちろほら見ることができる。

懐かしいな、β版が始まった時の光景を幻視して、僕はついそう思った。

とりあえず、愛しのみことさんはいるかなっと思いついて、ステータスバーの中からフレンドの名簿を呼び出す、たくさんの学生プレイヤーの名前が書かれた名簿をスクロールさせて目当てのみことを見つけるが、名前はオフラインの証である黒い文字で表示されていた。

ふむ、忙しいのかな？

聞いたことは無いが、β版で一緒に遊んでいるときも良く、バグが

出たなどで落ちるときがあつたので、きつとみことさんは管理者側の生徒なのだなー、と前々から思っていた。

流石に本営業で忙しいだろうし、しばらくは一緒に遊ぶのは無理かな？

じゃあ、とりあえず、バイト先にでも顔を出すかな。

目当てのみことさんに会えそうに無いので、僕はバイト先に行くことにした。

実をいえば>ログセリオン<の世界において学生の役目はβ版の被験者だけでなく、お店などの店員キャラも任されていたりする。

世界観、情景に力を注いだ>ログセリオン<の世界の自由度はかなり大きい、そして、β版をプレイしていた学生達には、特典であり義務であるお店の経営があつたのだ。

つまり、その辺の店舗などは学生達が運営している物が多いのだ。

僕も、学生であるかぎり、その役目から逃れられるはずも無く、超美人な魔女が店長の魔宝具店「ウィッチコンチェルト」にバイトとして雇われている。

まあ、お店は、「アレクセイ」にあるから歩いていってもすぐ付くのだが。

カランカランと鐘を鳴らしながら、見慣れた魔宝具店の扉を開くと。

「おー、まっっておったぞふうか」

と、いつもどおりのしゃべり方をする少女が立っていた。

「あれー、店長は？」

「ここに、いるじやろうが」

ふむ、声は聞こえるのだが？

「むむ？この声はどこから？」

「わしじゃー！ー！ー！」

少女でした。めっちゃ少女でした。

「店長、幼等部だったんですか？」

「小等部じゃー！」

怖くない、怖くない、前までの美人さんに怒られたときはとっても怖かったけど、あの美人さんをミニチュアにするとこんなにも愛らしく。

「店長、いや、アイリス店長抱きしめてもいいですか？、いや、抱き締めてもいいですか！ー！！！」

「……………なぜ、二回いったのじゃ？」

心底呆れた表情をする少女が立っていらっしやる。

「大切なことでしたので」

僕が、ビシッと答えると、店長は一步後ず去った。

その後、逃げる店長を捕まえて、カウンターの店員用のイスに座ってから膝の上に店長を座らせる。

幼女店長はしんそこ疲れた表情をしていらっしやいます。

膝の上に座ったまま、上目遣いでこちらを見上げると。

「ところで、ふうか、身長のとらんか？」

と訊ねてきました、ああー、美人状態だと妖艶な感じだったけど、幼女だと可愛い舌足らずな女の子ですね、もって帰っていいですか？

「生態情報をかぶせたら伸びました」

その返答に、苦い表情を浮かべる店長、

「わしは、縮でしまったのじゃー」

と、可愛くのたまってくださる。

「いいじゃないですか、私達は魔法職だから小さくたって変わりますよー」

と、頭をなぜなぜしてあげると、はうーと歳そうおうな表情を浮かべて弛緩なされた、襲っちゃいますよ店長？

そんな感じで、店長を抱いた状態でお店番、なかなか乙なものですなー。

カランカラン、鐘の音と扉の開く音。

『いらしゃいませー！』

ちゃんと仕事もしますよ、もちろんです。

さんわー ネカマな僕と幼女になった店長さん（後書き）

さんわー

連続投稿じゃあません。

打って書いて投稿！

鉄は軟らかいうちに打って奴です、違うか？

よんわー ネカマな僕と初心者な女戦士さん（前書き）

打って書いて投稿。

よんわー ネカマな僕と初心者な女戦士さん

『いらっしゃいませー!』

入ってきたのは、ふむ? 見た目、十四歳くらいでしょうか?

赤毛の戦士職の格好をした女の子ですね。

「すみません、ここは何のお店なんでしょうか?」

ああ、初心者プレイヤーの方ですか。

「ここはですね、生産職であるアイリス店長のお店『ウィッチコンチェルト』、魔宝具を売っておりますですはい」

そう、優しく返事をするよ。

「へ、生産職? ええ、じゃあ二人ともプレイヤーですか? NPCじゃないくて」

と、驚いた返事が返ってきたよ。

まあ、りっぱな店舗だしねー、学生プレイヤー御用達だし。

「そうじゃが? それがどうかしたのか」

と、お膝の上の店長さん。

「え、あれ? でもサービス開始は今日からだし、ええー?」

あれあれ、混乱していらっしやる。
と、考えて、一つのことに思い当たる。

「ああ、僕は学生プレイヤー、うんとねβ版プレイヤーていえばわかるかな？」

僕の補足にやっと、意味が通じた表情を浮かべる戦士さん。

「ああ、なるほどβ版プレイヤーさんでしたか」

うんうん、観察してみればなかなか可愛い子だなー、と気づかれな
いない程度に彼女を観察する。

いまは、納得してやっと意識が商品に向いたのか、棚を物色しながら、青ざめたり白くなったりしていますね。

「店長」

「何じゃ？」

と、上目遣いの達人。

「初心者用の商品陳列しましたか？」

「あ」

といって、口をふさぐ店長、可愛いけど、もう遅いよ。

ふう、とため息をついて、店員しか空けられないお店用の巨大なア

アイテムボックスを開いて物色を始める。

ふむ、力の指輪は戦士職なら必要かな？

後はー、守りの護符とレザー系装備一式位かな？

「店長、たいした儲けにならないですしこれあげちゃってもいいですか？」

「ふむ、まあいいじやろう、こちらにも落ち度はあるしのー」

と、少ししゅんと落ち込んでいる店長の頭をなでてから、赤髪の戦士さんに話しかける。

「すみませーん」

「……はい？」

こちらを振り向いた彼女の表情はグロッキー状態でした。

「本当に、すみません」

「ええ、なんのことですか？ いや、わかってます、わかってますよ、私ごときに売れる商品なんて無いんですよ、いいんですよ、こんな敷居の高そうなお店に踏み込んでしまった私が悪いんです、それでは！」

と、一気にしゃべると逃げようとする戦士の少女。

だけど、扉は無常にも開くことは無かった。

店長が、万引き対策の扉ロックを使ったのだろう。

おかげで、咄然としていた僕もはっと意識を取り戻す。

「すみませんというのはですね、学生プレイヤー相手にずっと商売していたから、陳列品が学生プレイヤー用になっていたんですよ、これはお詫びです受け取ってください」

といって、レザー系一式と力の指輪と守りの護符を彼女の手に渡す。思わず、受け取ってからわたわたする少女。

「え、え、でもお金はー」

「お詫びですから、いいですよ、僕らにとってはたいした額じゃないですしね」

特に、最初から生産職で通っている店長にとってはこれくらいはした金にすらならないだろう。

それだけ、生産職は需要の割に供給が不足がちに職なのだ。

「あ、ありがとうございます」

「いえいえ」

「あまり、気にしなくてもよいのじゃ、わらわも悪かったしのー」
てな感じで、ぺこぺこする戦士さんと、恐縮する魔法使いと、店長

さんの図が完成いたしました。

ふむ、せっかくだから、バイトが終わったら初心者プレイヤーさんのお手伝いでもしようかなー。

とか、何とか考えながら、カウンターの定位置に戻ると、傍にいた店長さんを抱きあげる。

「あ、あの」

と、まだいた戦士さんが話しかけてきました。

「お二人は、何レベルくらいなんですか？」

その質問に、

「ん？僕は50だよ」

「ふむ？わらわは50じゃな」

まあ、三年かけたしねー

まあ、三年かけたしのー

と二人同時に答えると、

絶句している戦士さんが目の前に立っていらっしやいましたとさ。

よんわー ネカマな僕と初心者な女戦士さん（後書き）

よんわー です。

初心者から見たら50レベルとはそれだけ高いのです。
サービス初日ですしね。

ごわー ネカマな僕とやって来た魔法使いさん（前書き）

ごわーです。

そろそろ、限界かなー

ごわー ネカマな僕とやって来た魔法使いさん

目の前には、なぜかぺこぺこする女戦士さん。

「ごめんさい、ごめんなさい」

えーと、なぜこのお人はこんなにも謝っているのでしょうか？

「えーと、どうしたんですか？」

はっきり言って、疑問です？

「すみません、すみません、そんな高レベルな方とは知らないで、私ったら失礼なことをしたような気がするし、アイテムと装備までいただいってしまったし」

切れ目なカッコイイといっても良い瞳を憂いに染めて、一生懸命ぺこぺこする戦士さん。

えーと、そこまでしていただく理由がわかりません。

「とりあえず頭をあげてください」

びっくりしたのか、フリーズしている店長さんをなでながら、彼女を落착かせようとがんばって見る。

正直、面倒だ。

と、思っていると。

カランカラン、と鐘を鳴らして、魔法使いの格好をした少女が入ってきた。

「おおー、こんなところにお店があったー……って、みーちゃんこんなところでどうしたの？」

ぺこぺこする、戦士さんを凝視してから、急に叫び始める魔法使いさん。

どうやら、知り合いのようだ。

「へ？ふわーーん、しーちゃん」

みーちゃんと、呼ばれた戦士の少女は振り向いて入ってきた魔法使いの少女を見てから、堰を切ったように泣きはじめると、そのまま抱きついた。

「お？おお？なんだ、どうしたんだ？」

おおー、本気でわたわたとしているなー、とのんきに眺めていると。魔法使いの少女に、キッと睨まれました、あらら、良く見たらその切れ目な目とか戦士さんに良く似てらっしゃる。双子かしら？

「その二人！みーちゃんに何をしたんですか！」

「いや、特に何も」

してないよね？ねえ、してないよね？

「う、ひぐ、ち、違うよ、しーちゃん」

「いいの、わかってるから、この二人がみーちゃんに何かひどいことをしたんだね、わかってる、わかってるから！」

してないよー？ねえ、きいてるー？

そして、胸の中で泣きじゃくる戦士さんの顔を優しく包んでから。

「だいじょうぶ、みーちゃんは私が守るから、だから笑って？」

か、かっこいい！僕もあんなことがいえるネカマになりたい、へ？
げんじつは？って。

そんなこと聞くもんじゃありません。

ところでー

「ごほん、世界作っているところ悪いけど、いいかな二人とも」

営業スマイル、営業スマイル、膝の上の店長さんなんて、もー茫然
自失を通り越して顔真っ赤にしているからね、なんて物見せてくれる
んですか、情操教育に悪いですよと。

「なに、何ですか？」

相変わらず、キツとこちらをにらみつけてくるみーちゃん魔法使い
さん。

「えーと、戦士さんが泣いちゃったのって、僕らのせい？」

その言葉に、眉をひそめると。

「当たり前です、ほかに誰がしーちゃんを泣かせたっていうんですか！」

断言だね、断言ですね、わかります。

「ちがうよー、ちがうんだよー」

と、魔法使いさんの胸からか細い声が。

「なにが、違うのよ？」

おおー、そのまま怒鳴ったよー、びっくりしたよー。

「えと、あのね、定員さんと店長さんは良くしてくれたんだよー」

その言葉に、また眉を潜めるみーちゃんさん、そんなに眉をひそめると皺がよっちゃうよー。

「じゃあ、誰がしーちゃんを泣かせたというのよ」

と、完全に尋問ですねあれ。

「え、えと、あのね、あえていうなら、みーちゃんかな」

オドオドだよもう、第一印象は、するどい目つきのクールな戦士さなんだただけだなー。

いまじゃ、もうただのへたれさんだよ。

「へ、なんでわたし？」

その返答は、心外だったらしく、本気で驚いているみーちゃんさん。

「だって、こんな人がたくさんいる所苦手なのに、みーちゃん、チ
ュートリアル終わったあとさっさとどこかに行っちゃうんだもん」

と、これもう完全にしーちゃんさんへたれだね。

「え、え、わたしなの、私が悪かったの」

あー、こちらもテンパッております。

ねえ、この收拾ってどうやればいいのかな？

ごわー ネカマな僕とやって来た魔法使いさん（後書き）

頭がひーとつてつく

そろそろ、やめまひよか

ろくわー ネカマな僕と気づきたくなかった現実（前書き）

ろくわー です。

ろくわー ネカマな僕と気づきたくなかった現実

「えと、えと、とりあえず、ごめんなさい」

「ごめんなさい」

と、頭を下げるみーちゃんな魔法使いさんと、しーちゃんな戦士さん。

ふむ、思い込みが激しいだけで根はいい子なのだろうか？

「いいよー、こっちも悪いところはあったしねー」

と、のんびりと返して見る、あれ、膝の上の店長さんいつの間にか寝てないか？

いやーほかほかしてる、何これカワイイ、キュンキュンするぜ。

店長さんのあどけない寝顔をつんつん、うつ、うなー、ですと。

と、寝ごとに悶えていると。双子らしき二人が何か差し出してきた。

「あ、あの、迷惑かけて、それでもこれなんてずうずうしいと思うんですけど」

「すみません、ごめんなさい、でも、それでも」

『フレンドになってください！』

おおー、とびくりと店長さんが目を覚ます、あ、ちょっと、もうち

よつと、堪能していたかった。

「僕らが？ いいのー、そんなに強くないけど」

「な、なんなおじゃ」

かんでるかんでる、店長さん、よしよし、と頭をなでてやるとふにゃーって顔をするんだよなー。

前の美女状態も捨てがたいが、これはやっぱりイイ。

「いえいえ、初心者の私達から見たら50レベルとか天と地の差ですから」

「と、いうか、普通に高レベルキャラですから二人とも」

まっね、実をいえばこの『ログセリオン』では、レベルをあげる方法はひとつではない、自由度の高いのゲームは、簡単にいえば息をしているだけでもレベルが上がるのだ。

つまり、モンスターを倒すだけでなく、何をしたか、どんな生き方をしたか、で経験値が常に入ってくるのである。

その代わり、やはりレベル上げはかなり困難になる。

学生プレイヤーにしても、50台までいつている人は百人くらいしかいないだろうなーと思う。

それだけ、レベル上げが大変だが、そこは自由度の高いこの世界、そのうちあげるだろー、と達観していた上に、この世界ではほぼ最強だろうプレイヤーのお方とずっと行動を共にしていたら、50まで

いつの間にか上がっていたのが真実の所なのだが。

ちなみに、そんなわけで店長の生産職でありながらレベル50はかなりすごい領域だったりするのだが。

「まあ、いいよー、二人ともいい子みたいだし、なれてきたら僕の戦闘職系の友達でも紹介するよ」

と、ノンビリ答えて見る。

「ほんとですか!？」

「いいんですか!？」

やっぱり双子かな、この二人、驚いた時の顔そっくりだし。

と、何とか考えながら二人の差し出していた、ステータスカードのフレンド欄に自分の名前を書きこんでいく。

ほらー店長も書きなよー。

「ふん、しょうがないのじゃ」

と、すっごーい笑顔で書き込んでいく店長、二人分書き込んでつと。

「はい、かんせーい」

「したのじゃ」

これで、二人のフレンド欄には僕らの名前が刻まれたはずだ。

そして、こちらが書き込むと、こちらのフレンド欄にも、しーちゃん、みーちゃん、と名前が。

て、お二人とも愛称じゃなくキャラ名ですかー！

本当に、しーちゃん戦士とみーちゃん魔法使いなお二人でした。

「えーと、アイリスさんと、ふうかさん・・・」

「どうしたの？みーちゃん」

僕らの名前を読んで、固まるみーちゃんさんに心配そうなしーちゃんさん。

「って、ふうかー！？？・？」

本日、二度目のテンパリ発動！

「は、はい？」

思わず返事してしまったぜ、びっくりした・・・。

「あ、あの、本当の、魔法使いで、名前がふうか、なんですか？」

切れ切れだね？確かに僕はふかかだが。

「うん、そうだけど」

なぜなぜ？そこまでびっくりなさる。

「じゃ、じゃあ、あのCMのふうかさんなんですか？氷の魔女の？」

そこまでいわれて僕も思い当たった。

『ログセリオン』のCMで、戦闘職や生産職などの紹介の部分で、高レベルプレイヤーのキャラを使用したのだ。

そして、魔法職のひとつ「氷の魔道士」＞アイスラグナー<の紹介で確かに自分のキャラが使われて記憶がある。

そして、この国ほとんどの人間は少なからず『ログセリオン』のCMは一回は見ているだろう、特にプレイしている人間のほとんどは。

とりあえず、取り合えずだ、この世界で僕は結構有名人らしいということに今更気が付いた僕だった。

ろくわー ネカマな僕と気づきたくなかった現実（後書き）

意外と、有名人かもしれない主人公です。

ななわー ネカマな僕と職業説明（前書き）

ななわー。

M2ー1015先生ー、わざわざ感想ありがとうございます。

基本どこまでもだらだら、ゆるゆる、ですが楽しんでくれたら嬉しいです。

ななわー ネカマな僕と職業説明

「めっちゃくちゃ、有名人じゃないですか！」

そ、そんなことないよー、僕は無実だよー、悪いのは広報の新聞部とかってにCM出演を決めた企業のほうが悪いんだよー

「き、気のせいじゃにやいでしょうかん」

あ、しまーった。

「ふうか、言葉がめっちゃくちゃになっとなるよ」

あなたにいわれたくない幼女店長。

「ところで、アイリスさんは生産職って行っていましたけど・・・」

おお？ 矛先が店長に、みーちゃんさんのほうはまだ納得できていないようですが。

うむ、確かに店長は真正銘の生産職だね、ところで、そんなに恐る恐ると、どうしたのしーちゃんさん。

「まさか、『銀眼の魔器士』>ウエスデットスミスくのアイリスさんじゃ」

うん、そうだね。

「ああ、そうじゃな」

ピシッと固まる二人、ああーそうか、店長CMの時は美女アバターだったから？

と、思い至ってようやく、二人がなぜかたまったのかに思い当たる。

「なぜ、ちっちゃくなってるんですか！」

まあ、アレですね心のそこからの叫びって奴ですね。

「まあ、生態情報をかぶせたからなのじゃが」

「ちなみに、僕もちよっと身長伸びているしね」

と、答えるとまた二人は固まった。

「それじゃあ、二人は現実ではめっちゃめちな美少女と美幼女ってわけですか？」

恐る恐る聞いてくる、二人組み、さっきと違ってどこか好奇心も混ざっていますねー。

でも、あつれー、顔わかんないようにめがねかけているんだけどねー。

「うーん、ほとんど素顔だよ、いじってるのは髪とめがねだけかな、僕は」

まあ、めがねはプライバシー保護のためにね、と答えると納得したように、ウンウンうなずいていらしゃいます。

「ふむ？ そうなのかふうか、わしはほとんどいじっておらんぞ？」

へ？ まじですか？

そのくりくりとした、可愛い瞳も？ その流れるように愛らしい銀糸も？

それって、かなりヤバイから！

「店長、今度一緒にペルソナアイテム買いにいきましょうね」

はあ、とため息をついて、そう提案する。

まあ、ペルソナアイテムとは認識障害アイテムとも思ってくればいい、まあ、僕のめがねのようなものだね。

しーちゃんは、顔にカッコイイ刺青を入れているし、みーちゃんも良く見たら左右対称の刺青を入れている、多分これがペルソナアイテムの変わりになっているのだろう。

まあ、生態情報が使用できる以上、必要なアイテムだといってもいい。

「一緒に探してあげるからねー」

と、店長の頭をなでなでする、ふーあったけー。

「そういえば、具体的な説明はCMじゃされてなかったですけど『銀眼の魔器士』>ウエスデットスミスくって、どういったジョブなんですか？」

あー、なかなか難しい質問をするなー。

何せ、この『ログセリオン』はプレイしているプレイヤーの数だけ職業があるといっても過言じゃないんだ。

大雑把に、戦闘職、魔法職、生産職、など分かれていても、その職業ははっきりしない。

いま現在、二次職であるふうかとアイリスだが、自分と同じ職業のプレイヤーを見たことがないのだ。

つまり、最初に戦闘職なら戦士や騎士など大雑把に決めると二次職からは、それまでの行動経験値に酔ってジョブチェンジするのである。

少しわかりにくいかもしれないが、生産職の鍛冶職にしても、刀系の武器ばかり作っていたなら刀鍛冶となるといえばわかるだろうか？

ちなみに、僕は魔法職、魔法使いで、氷魔法のみを使用していたら、ジョブチェンジで「氷の魔道士」>アイスラグナー<になったのだ。

たしか、店長は生産職の魔宝具士から始めたはずだ、そして、好き勝手にいろいろを出していたら、いまの職業、『銀眼の魔器士』>ウエスデットスミス<になっていたと聞いた気がする。

まあ、ジョブチェンジに付いては、学生プレイヤー達でもわかっていないところは多いのだ。

そして、彼女が聞いてきた、『銀眼の魔器士』>ウエスデットスミス<は確かー

「魔宝具、魔道具、魔法武器、魔法防具の生産職業だったけ？」

「ふむ、確か、そんな感じじゃー」

ほわー、店長はやっぱりかわゆなー、今度飴でも買ってこようかな。

「何ですか、そのチート職業は！」

チートですか？ふむ、確かにそうですね。

ななわー ネカマな僕と職業説明（後書き）

ふむ、二話以降、風花さんがでてきませんヒロインなのに。

まあ、まだでてこないですね。

というか、いい加減お店から出てください四人とも。

こんな、だらだらと話を続けて駄目じゃないですか！

と、風花さんが言っております！

でも、まだでません、ええ、引きこもってやりますとも！

はちわー ネカマな僕と天使な僕だと？ (前書き)

はちわー だべだべー

はちわー ネカマな僕と天使な僕だと？

「まあ、すぐくはあるけどチートじゃないよー」

店長をなでなで、アイテムボックスを探して見たら、昔やった何かのクエストイベントのペロペロキャンデーを見つけたので、店長はそれをほおばっている。

おおー、かわえー

「店長のジョブは、魔道系は何でも作れるけど、普通の武器は作れないし、強化もできないからねー」

おお、何なんだこのほっぺは、まるでマシユマロのような、しかしその弾力は確かムニムニとはじき返すような玉の肌、この絶妙なほっぺたはー！ 気持ちが良いすぎる。

「な、なるほど、それはまたなんとも極端な話ですね」

と、しーちゃんは頷いている。

これは、アレかアレなのか、この絶妙な感触とくらぶべくものといえbaumう、アレしか！

「ところで」

どこか、納得行かないと行った顔でみーちゃんが話しかけて来た。

「どうしたのー？」

ほう、まさか、口の中に飴を含んだまでも、その頬は弾力を失うことも無く、いまもつやつやと輝いているとは！

「ふうかさん、さっきからしゃべっていることとぜんぜん違うこと考えてませんか？」

ばれただど！偽装は完璧だったはずだ！

「何のことかな？」

気のセイだ、考えるな！

「まさか！」

急にしーちゃんさん、とみーちゃんさんがはっとした表情をする。

まさか、ばれたのか、僕が店長ほったに至福の表情を抱いていたのが！

「やっぱり、私達は迷惑な存在だったんですね！」

「ごめんなさい、ごめんなさい、もう近づきませんから許してください！」

しーちゃんさん、みーちゃんさん、あなた達やっぱり双子でしょ。

そっくりだよ・・・。

そのご、おろおろするしーちゃんさんに、魔法使い用のローブ一式と、魔力の腕輪、反魔法の護符を押し付けて落ち着かせるまで30分くらいかかった。

「こんないいもの受け取れません！」

ようやく、立ち直ったみーちゃんが受け取りを拒否されました。

「いいのいいの、しーちゃんさんにもあげたから」

その言葉に、しーちゃんの姿を見て初期装備じゃないことにより、うやく気が付いたようです。

「しかし、私は」

しかし、案山子もありませぬ！

「せっかくフレンドになったんだから、受け取ってくれないかな？」

そういつて、おもいっきり微笑んで見ました。あれ？顔を赤くしているんですけどなぜ？

「・・・はい、ありがとう・・・ございます」

何で、お礼の言葉が尻すばみに？

良く見たら、みーちゃんさんの後ろに立っていたみーちゃんさんも顔が真っ赤ですよ？

なぜ？

と、店長を見ると、まだはぐはぐとぺろぺろキャンデーを舐めていました。

かわえー！リスみてー！

「さてと」

と、ようやく満足したらしい店長の手を握ってとことこと歩き出す。

「ふえ？どこに行くのじゃ、ふうか」

必殺、幼女の上目遣いアターーーーック！ふうかは1500のダメージを受けた。

「いままのままじゃ危ないですから、ペルソナアイテムを買いに行きますよ」

僕の言葉に納得が行ったのか、店長がコクコクとうなずいている。

ええ、それはもう。全身を使ってうなづいている。

「うむ、買い物に行くのじゃな」

ええ、そうですねまあ、間違っではないです。

まあ、とりあえず、つと僕がかけていためがねを外して店長にかけてあげる。

僕は魔女っ子帽子を深くかぶっていれば早々顔は見えないしね。

さて、行きましようか。

カランカラン、と鐘の音を聞きながらお店を出て行く。

ふと、お店の奥を見ると臨時店番用のNPCが奥から出てくるところだった。

「おみせ、頼むね」

「はい、マスターをよろしくお願いします」

店番のメイド型NPCに声をかけてから今度こそ、僕らはお店からでて歩き始めたのでした。

「今の、見た」

「うん」

まだ、お店に残っていたしーちゃんとみーちゃん、その二人の顔色はもう赤いを通り過ぎて、熟れた林檎のようになっていた。

「めがねかけてても、可愛い子だなと思ってはいたけど」

「うん、外したら、何かもう」

「負けた気がする？」

「勝負にもなってない？」

そう、たまたま、店の奥を振り向いたふうかの素顔を見てしまった二人。

その顔は、しばらく赤く染まったままであつたそうだ。

『何か、もう、アレかな、天使？』

はちわー ネカマな僕と天使な僕だと？（後書き）

ようやく、お店を脱出いたしました。

ネカマな僕の素顔を見てしまったお二人様、合掌。

きゅうわー 歩く私と青空と始まり（前書き）

今回は、もう一人の主人公、ヒーローにしてヒロインな風花さん視点です。

きゅうわー 歩く私と青空と始まり

わずかな、ノイズをはさむことなく目の前にリアルな世界が映し出される。

場所は、始まりの街アレクセイ、その広場にでんと鎮座する転送ゲートの前だった。

とつとつ、いきなり覚醒したものだから、目の前のプレイヤーとぶつかりそうになった。

目の前の人ごみを避けて壁際によりながら、ふと笑いがこみ上げてくる。

こんなに、人が多いアレクセイの光景を見るのは何年ぶりだろうか、ふと思ったのだ。

学生プレイヤー達にして見れば、もうほとんどアレクセイに用があるもの達はいないだろうし、わざわざ、残るような物好きも少ない。私に元気をいつもくれる彼女のように、この街を拠点にして動いている学生プレイヤーはほとんどいないのだ。

ん？ 惚気じゃ無いぞ！

ごほん、例外といえば、彼女がバイトしている「ウィッチコンツェルト」の店長ぐらいだろうか？

まあ、今に限っていえば、初心者プレイヤー相手に行商を行ってい

る学生プレイヤーが、広場にちらほら見受けられるので、彼女達に限ったことではないのだろうか。

その、光景に目を細めながら、何と無く彼女を探しながら、私は歩き始めた。

なんだ？フレンドコールをすればいいじゃないかだと！？

こう、なんだ、こう何気なくあるいていて、たまたま出会えるのが嬉しいんじゃないか！

運命みたいで！！！！

ごほん、ごほん・・・

妄想暴走でほてった頬を冷やすような気分で、私は少し歩調を速めた。

アレクセイの街を晴天の太陽の下、とことこと歩いていく。

そして、ふと頭を空に向けて微笑んだ。

「そういえば、こんな晴れの日だったな、彼女に出会ったのは」

え？フラグ？

じゃ無いよー！ー！

そう、どこまでも透き通った青い空の下で、その風景に溶け込むように体育座りをして彼女は笑っていたんだ。

その姿は、まるですべてが青になったみたいだった。

どこまでも、包み込むような青空みたいに。

「へ？ 風花会長、自分のアバターがほしいの？」

私の前で、驚いた顔をしているのは、『ログセリオン』のグラフィックを担当しているグラフィック部の部員であり、私の親友でもある少女だった。

「いいじゃない、私だってまともにプレイしたいのよ」

やっと、β版の運営が起動に乗り、少し仕事も減ってきて、最近やっと自分でも遊んで見たいと思えるようになったのだ。

まったく、生徒会なんて入るものじゃないかと最近をよく思う。

生徒からの苦情は殺到するし、バグが発生すれば寮に戻る暇も無いし。

しかも、先輩達は次の副会長に私を推薦する気満々だし。

絶対、押し付ける気だよあの人達、副会長にされるだけならまだい

いけど、いや、良くはないけどさ、そのまま、生徒会長にまでされたらたまったもんじゃ無い。

本当に、死んでしまうわ！

なんて、愚痴はおいておいて、最近やっと落ち着いてきて私自身プレイに興味がでてきたのは本当だ。

だから、GMキャラ以外の自分用のキャラがほしくて親友でグラフィック部の彼女と話しているのだが。

「ゴメン！私、まだ新ジョブ用のモーショングラフィックが上がって無いんだわー」

めっちゃ、謝られました！

ていうか、新ジョブの管理者は私なんですけど、遅らせてたのお前か！お前なのかぁ！！！！

「まあ、変わりに我が部の切り札に頼んで見るから、ね！ね！」

合掌ポーズで、頭を下げながら謝る親友、私としては、君が作れないことより、仕事が遅れているを謝ってほしいんだけど！

「とりあえず、私から風花のシャメわたして、そっくりに作ってもらうから！じゃ」

そして、びすいー！！っと片手をあげると彼女は疾風のごとく走り去って行った。

「お願いだから、先に仕事を片付けて」

私の、悲しい声だけが廊下にこだましたのだった。

そして、次の日私の机の上にはハンドモバイルに差し込む型のUSBメモリが二つ。

ひとつは、昨日あの後、死ぬ気で仕上げたらしいグラフィックのデータ。

あのとときの私は、今にも殺人を犯してもおかしくない形相だったと、後に親友は語っていました。

そして、もうひとつは、私のアバターデータだった。

私そっくりな顔立ち、長く黒い髪をポニーテールに結い上げた頭と少し切れ目がちな瞳、その瞳は右目は黒で左目が悪戯なのか透き通るような青色をしている。

同じ髪型でめがねを外して鏡を見れば、それはまんま私だろう。

ただね・・・

なぜだ、親友よ、そしてこれを作ったらしい切り札さんよ、そして私自身よ・・・

このキャラ、どう見ても中性的な男じゃん。

そう叫びながら、私は性別設定の欄の男の部分を押し込んだ。
いうならば。

「おとこじやーーーーーん」

ぽちっとな、的な感じですが、もちろん後悔しています。

そして、女なのにめがねを外せばカッコイイといわれてしまう、そんな私の男性キャラなオンラインライフが幕を開けたのだった。

きゅうわー 歩く私と青空と始まり（後書き）

僕視点の話が、題名がネカマな僕とーで

私視点が、一な私とーになる予定です。まあ、一二話は導入なので勘弁してください。

予定では、二三話、私視点で書くつもりです。

はあ、ただ、女の子視点は疲れる・・・。

僕視点は結構ぽんぽん出てくるんですけどねー。

じゅうわー 待つ私とウザイ親友と田中さん（前書き）

田中さん？誰だよ。

じゅうわー 待つ私とウザイ親友と田中さん

どれ位、時間が流れたころだっただろうか？

日ごろの、溜りにたまったストレスを『ログセリオン』の世界のモンスター達にぶつけまくっていた私がいつの間にか、二次職への転職を済ませ高プレイヤーとして数えられ始めたころの話しだっただろうか。

ログイン前、自分にそっくりな3Dモデルの自分を眺めていた私は、ふとこのもう一人の自分を作り上げたグラフィック部の切り札さんとやらに会って見たくなった。

カチカチ

「と、いうわけで会える？」

ポチ

送信っと。

ブー、ブー、とうるさくないようにバイブレーションに設定してある携帯が自己主張を繰り返している。

何何？

「私？私に会いたいの？会いに行く、すぐにいく？どこに行く？」

何か、微妙にウザかった。

ちなみにメールを送った相手は、例のグラフィック部の親友である。

とりあえず。

「おまえじゃねーよ！」

っと、ポチ

そーしん。

数秒後、ブーブーブー、うるせー！

ねえ、バイブレーションって意外とウザイよね？

と、思いながら返信を確認する。

「ふうかー！ ツンデレね？ とうとう本来の自分に気がついたのねー！」

ウザかった、三割り増しぐらいでウザさが増していた。

とりあえず、返信。

「黙れ、死ね、そして会いたいのはおめえじゃ無くて私の3Dモデルを作った子だ」

そして、コンマ一秒後、扉の開閉音と共に彼女は私の部屋に飛び込んできたのだった。

ちなみに時刻は午前一時、場所は寮の自室である。

「なんでじゃーーーーー!」

こちらの科白である。

「何で、あちきが死なないといけないんじゃきん」

もうめちゃくちゃだ。いろいろな意味で。

「おいどんは、あんたのことを思ってー!」

私の部屋のドアを蹴破ったと。

「もうしわけありませんでした」

そして、彼女は現在土下座している。

もちろん、あたしにではない、相手は寮母の田中さんだ。

「田中さん、もう許してあげてください、私の方からも良く言っておくので」

と、私がいうと。

「風花ちゃんの頼みならしょうがないね、扉は明日直して置くよ」

と、とてもいい笑みを浮かべて帰って行きました。

「まあ、罰として、寮の全部のトイレを一週間掃除だけどね」

さすが、田中さん、ちゃっかり仕事を押し付けていくのも忘れない。

まあ、一息ついて。

「それで？切り札君には会えるのかしら？」

と、訊ねて見ました。

その、見事に土下座したままの背中に。

ん？あれ？寝てる？

しゃーないなー、とりあえず。

ごす、ベコ、メキ。

三段活用です。

決して、蹴り上げからの、踵落とし、踏みつけの三コンボではありません。

「あんた！乙女の顔になんてことするのよ!？」

ようやく、おきましたね。

まあ、田中さんのありがたいお言葉が無視して爆睡していたお前が悪いと思います。

「それで？会えるの会えないの？」

だから、無視です！私はそこまで心が広くないんです。

「はあ、会いたいなら、とめないけど・・・、後悔しないでね」

何でしょう？忠告ですか？お前のような奴がいつの間に私様に忠告できるほど偉くなったんだ、と視線に込めておきました。

「まあ、会いたいなら『青の原画』フィールドに行くことね」

伝わらなかったようですね。

「『青の原画』フィールド？モンスターも出ないのに、なぜそんな所にわざわざいるのです？」

原画フィールドとは、そのままの意味ですね、『ログセリオン』に数々の場所、たとえば海ならその元になっている海のグラフィックが置かれている試験フィールドのことですね。

まあ、巨大な『ログセリオン』のブラックボックスですね。

つまりその切り札さんがいる場所は『青のフィールド』と、いうことは空や海、川など青色にまつわるものが格納されている試験フィ

ールドをさしていることになるわけですねー。

それでは、行きましようか。

「まあ、ふうちゃんなら知っているとと思うけど、あそこにはアクセス制限がかけられているからグラフィッカー以外ははいれな．．．」

ーログインー

ーコンテニューー

「で、ちよつとーーーーー！」

親友の絶叫が聞こえた気がしましたが？

気のせいでしょうね。

じゅうわー 待つ私とウザイ親友と田中さん（後書き）

たった三行の田中さん。

やっぱり、ネカマな僕とーは書きやすいわー。

じゅういちわー 苛つく私と味のしない紅茶と相変わらずザイ親友（前書き）

ログイン！

じゅういちわー 苛つく私と味のしない紅茶と相変わらずウザイ親友

ホワイトアウト！

私は現在、私のアバターである「みこと」として、街を闊歩しております。

ふんーふーふー

機嫌がいいですね、自分でもわかります。

いやー、この「みこと」を作ってくれた方に合えると思うと機嫌も良くなりますって！

ドドドドドドドドッ

さてさて、「青のフィールド」でしたか？ 転送ゲートから向かいますかねー。

「まてまてつまーーてーーーい」

うるさいですね！何なんでしょうかねこのうるさいハエは、とりあえずつぶします。

と、私が振り上げた裏拳は、確かな感触の元、親友のアバターの顔面にめり込んだのだった。

「ふうか、これもう親友に対する接し方じゃないよね」

あら、失礼な人ねー

「これが、私の愛情表現だよ！」

ズビシ、と、地面に倒れこみながら、オヨヨと泣いている親友風味のバターにいつてやりました。

そう、いつてやりましたとも！！！！！

あー、すつきり。

「お前は、ゆがんでいる！！！！！」

あーうるさいな！！

なんか、親友が叫んでいますね、あれ、私の足がかってに？

ゲシゲシ

「え、ちょっと？ふうかさん？いやーーーー！！！」

ゲシゲシ、ドゴ、バキ、ゴキ。

「それで？どうしたの、そんなに急いで」

所変わって、私達は近くにあったカフェに入りました。

あー、早く感覚情報が実装されないかなー。

この、甘いパフェが食べたいです、こっちだったら、いくら食べても太らないでしょ？

と、まだ、味のしない紅茶を気分だけですすって見る。

うん、なかなか？

「あのねー、大変いいにくいんだけど、「青のフィールド」にはグラフィック部以外はいれないんだよ」

目の前で、深々と頭を下げている親友。

あれ、なぜ机に頭をそんなにがんがんぶつけているのですか。

あら、良くみたら、頭の上には私の手が？不思議ですね？

「ちょ「ガンガン」きいて「ゴス」ち「メキ」ふうか！」

ちっ！振り払いやがった。

「はあはあ、まあ、いいわ、いつものことだし」

それは、こっちの科白だ！

「いや！私の科白よ！」

親友が、天に向かって咆哮をあげました、この子にはそろそろ黄色

の救急車を呼んであげたほうが良いのでしょうか？

「やめて、ジョークになってないから！」

まあ実際、過労やストレスで運ばれた生徒は数知れずですしね。

「はあ、それで？ 私は「青のフィールド」に入れないと？」

とりあえず、紅茶でも飲んで落ち着きましょうか。

「うん、あそこは私達の領域だからね、流石に管理者と行っても、ただで入られたらほかの部員に示しがつかないと思うし」

はあ、そういうことですか。

「それで、何を条件にすれば入れてくれるのかしら？」

まあ、できるくらいの譲歩ならくれてやろう。

「うーん、うちらもみんなこのゲームにはかなり命かけているからさ、固有武器が欲しいな」

へ？

「あら、そんなものでいいの？」

私の言葉には、今度は向こうが驚いたようだ。

「いいの！？」

まあ、実際、上ではそういう話もあったのだ。

今回の功労者達にそれぞれ、何かアイテムか武器でも送ろうかっていう話があったりしたのだ。

まあ、とりあえず本営業までは見送ろうという、決定になっていたのだが。

それを、即急に進めればいいだけの話なので、そこまで苦勞もない。

「いいわよ、もともとバイト代を増やすより、固有武器を与えたほうがあなた達は喜ぶだろうって話が合ったくらいなもの、すぐ欲しいなら、一週間後までにグラフィックなどを纏めておいてね」

「うん」

とても、いい笑顔でした。

「それで？これで『青のフィールド』に入れるのかしら」

「いいよ！・・・でも、何でそんなにあの子に会いたいのか？」

え？そういえば、なぜ私はこんなにも必死になっているのかしらね？

「そうね、わからないわ、でも、あったらわかりそうな気がするの」

まあ、わからなかったわ、悩んでもしょうがないし。

「まあ、いいや！『青のフィールド』には転送ゲートに『青き清浄なる地』で打ち込んでから、パスワードに『最後の天使』って打ち込めばいいわ」

『最後の天使』？はあ、まあうちの学校はそんな奴ばかりだけど。

「だれ？そんないたいパスワードつけたの？」

「え？私ただけど？」

お前かーーーーー！！

身近に、一番いたい人がいたのに驚愕した私だった。

「なぜ私は、こんな奴の親友をやっているのだろう」

はあ、とため息をついて、味のしない紅茶を一気に飲み干す。

おかげで、

「こっちの科白よ・・・」

彼女の声は聞こえなかった、ええ、聞こえませんでしたとも。

後で、殺す！！！！

この後、すっかりとした顔でゲートに向かう男性キャラと、喫茶店の路地裏でHPバーが0の状態で倒れている少女のアバターが目撃されたそうさ。

じゅういちわー 苛つく私と味のしない紅茶と相変わらずザイ親友（後書き）

やっと、会えますね。

次回です。

じゅうにわー 息の荒い私とドキドキする心臓と逃げる彼女（前書き）

到着、やっと出会います。

じゅうにわー 息の荒い私とドキドキする心臓と逃げる彼女

一瞬のノイズ。

それが、はれると共に、世界が「青の世界」が私の前に広がっていた。

海、川、湖、青々と生い茂る原生林が、風なびく草原が。

そこは確かに「青のフィールド」だった。

と、いうか。

普通に森も「青」のカテゴリーに含まれるのですね。

現在地は、森を右手に見ながら海に向かって、草原の中を歩いていく、そんな感じだ。

さてさて、愛しの「切り札ちゃん」はどこにいたのでしょうか。

圧倒的な光景によってしばし忘却していた、本来の目的を思い出すと私は、海にむけて歩き出した。

それは、なんというか？

幻想的な光景だった。

ザザーッと流れ来る海、そして砂浜、鬱蒼と生い茂る原生林、そして草原。

その三つの空間のちょうど中間、その境界点に彼女は座り込んでいた。

何かをじっと見つめているような、でも何も見ていないような。

そんな、視線でただ海を眺めていた。

魔法職らしい、「魔女の三角帽」を深くかぶって、黒いマントを地面にひいて、その上で体育座りした可憐な少女。

上に着ている黒い制服のような服から伸びた華奢な腕、短めのスカートの間から見える白く細い足。

そして、私の視界を覆い尽くす赤いえきた。．．い。

そのまま、私の意識はフェードアウトした。

「．．．じょうぶ？．．．大丈夫？」

は？

目を開けると見慣れた自室の天井ではなく、可憐な少女が私の顔を覗きこんでいました。

神様仏様天使様、後誰か？これはキスを、あのプルプルした唇を私のものにしていいってことですね。

啓示ですね天啓ですね祝福ですね天国ですね！！！！

って？あれ？何で目の前の美少女はおびえた表情をして後ず去っておられるのですか？

ハアハア。

なぜか、背中をむけて走り出しましたよ？

は！ここは、なんと砂浜じゃありませんか！

これは、あの夢の「つかまえてごらん、あははははは」ですね。

さすが神様仏様天（以下略）

そうとなれば手加減は不要ですね。

全力で、そう最近、β版最高レベルになったこのアバターの全力で！！！！

彼女を追い詰める！！！！！！！！

その後、砂浜を全力で疾走する顔の半分を血で染めた騎士と、それから全力で逃げ回る魔法使いの少女がいた光景を、見た者は誰もいなかった。

アクセス制限あるからね！

「何で、逃げたんでしょか？」

やっと、正気に戻った私は、今現在、目の前で体育座りをしている美少女に話しかけた。

ちなみに現在地は、最初に彼女がいた境界点の場所である。

ただし、原生林の側で半分隠れるように器用に体育座りしている彼女と、草原地帯に座り込んだ私の間には壁のように境界線が引かれているが。

「……………あれは、獲物を狙う獣の目だった」

イヤー！！この少し震え気味なソプラノが耳に心地いい！！！！

録音して永久保存したい！！

「今も、同じ目、してる」

あ、これですか、この目が悪いんですね、でも、挟ったりはいたしません。

そんなことしたら、彼女のこのプルプルしたカワイラスイー！！！
お姿が見えなくなってしまいうじゃないですか。

だから！

「我慢してください！！」

それは、私の魂の咆哮だった。

「え？何で？」

綺麗なソプラノが困惑にゆれる。

「目を挟ったりしたら、君の可愛い姿が見れなくなってしまうじゃないですか！」

ええー！って顔の少女。

「それに、あなたが作ってくれたアバターに傷をつけるわけにもいきませんので」

と、にっこり笑ってみます。

「へ？あ、本当だ、最近作った気がする？」

と、やっと気がついてくれた彼女なのですが。
なぜ。

「なぜ、疑問系ですか？」

疑問系なのでしょう？あれ？思考と直結して口が動いてませんか、私。

「いや、だって一番忙しい時に、先輩に押し付けられたから、記憶が曖昧に・・・」

と、そこまで言って、彼女は「ヒイツ」と小さく悲鳴をあげて固まりました。

私の顔を凝視したまま。

まあ、固まってもしょうがないですよね。

自覚ありますから、私の顔は今怒りに染まっているでしょうから。

「あいつ、どんな死に方が好きかな・・・」

その瞬間、私の頭の中では、親友を殺す37の方法と100の拷問方法がかけ巡っておりましたとさ。

あとで、ふうかから。

「あの時、僕は君の顔に修羅を見た・・・」

と、いわれた時は流石に落ち込みましたけどね。

じゅうにわー 息の荒い私とドキドキする心臓と逃げる彼女（後書き）

まあ、顔の半分を血で染めた人が、血走った目で追っかけてきたら
普通逃げますよね。

私は、全力で逃げます。

じゅうさんわー 時間が来た私とビクビク少女と友達（前書き）

風花さんキャラ崩壊中。

今回こそはクールなキャラに！

じゅうさんわー 時間が来た私とビクビク少女と友達

ようやく打ち解けてくれたのか、彼女はやっとともに話をしてくれるように成りました。

「それでは、貴方の好きなタイプを教えてください」

打ちとけるために使う常套句ですが、これで、彼女もイチコロです！

「え、・・・その、あえて言うなら、人を殺すような目つきを浮かべない人が・・・」

私と、目を合わせるか微妙なところでチラチラ、可愛い！

なに、この上目遣い、天才ですか、彼女は人を悩殺するスキルをお持ちなんですね！

「好きな色とかは、ありますか?!」

ハアハア。

「え、・・・と、あおでしょうか」

いま、一歩後ろに下がりましたよ。

まあ、気にせずに。

彼女が作ったこの「青のフィールド」を見渡して見る。

「そうですね、確かに君は青が好きみたいです」

と、しみじみと呟くと。

「え？わかるんですか？」

心底、驚いた声をもらしております。

でも、ねえ、周りを見ればわかりもしますよ。

だって、

「ここには、貴方の気遣いが、優しさが、あふれていますから」

身体をくると回す、360度、世界すべてこの「青の世界」をいっぺんも見逃すことがないように。

「ここには、貴方の気持ちが詰まっていますから」

と、笑いかけた。

嘘じゃない。

流れ返すあの青い母成る海も、風と共に踊る草原も、鬱蒼としながらどこか好奇心をくすぐる原生林も。

すべてが、すべてに、この目の前の、彼女の愛があふれているように見えた。

そして、どこまでも透き通る空に、あの青く澄み渡る空に、彼女の

笑顔が見えた気がした。

なに？

意味がわからないって？

こういうのは気分なんだからいいの！

どれ位、話したらか。

長いような、短いような、あっという間に時間が過ぎてしまったよ
うな気がする。

「あっというまだね」

思わずもれてしまった言葉。

「うん、たった三十分位だけどね」

へ？それだけ？

「そのうち、十分は鼻血を出したおにーさんが気絶していて、その
後、十分ほど追いかけて、十分ほど話したね」

それは、あつという間ですね、わかります。

ところで、おにーさんって私？　そういえば男キャラでしたっけ。

まあ、いいや、名残惜しいけど、明日も忙しいですから今日はもう落ちないですね。

明日から、目の前の少女を含めた功労者達に送る固有武器の製作を行わなければいけない。

これは、忙しく成りそうだ。

と、少し憂鬱な気分を振り払いながら。

「それでは、私はそろそろ落ちます、今日は楽しかったですよ」

目の前でオドオド、プルプルしている、可愛い魔法少女さん。

これは、アレですね、良くある展開ですね。

例のアレです、こう手をだして名前を言い合う場面展開ですね。

「また、会えたらお話してくれますか、魔法使いさん？」

そう、笑いかけると、彼女はあきらめたように返事をくれた。

「ええ、もう血まみれで追っかけてこないと誓ってくれるなら」

む、心外だな。

私は、ただお友達に成りたかっただけなのに。

お友達？ ああ、そうだついでにフレンド登録もお願いすればいいですね。

出していた手を引っ込めて、変わりにステータスカードを取り出す。

「良かったら、フレンド登録もお願いできますか？」

彼女は、何もいわず私のフレンド欄に名前を書き込んでくれました。

「ふうか、ですか・・・」

奇しくも私と同じ名前を、持つ可愛い魔法使いさんとの出会い。

それが、始めて彼と会った時の私の記憶です。

帰ろうときびすを返してから、ふと、思い当たりました。

そういえば、このままノリで、友達に成ってしまえばいいんじゃないでしょうか。

フレンドなんてそんな、表面だけの付き合いじゃなくて。

こう小説とかでもあるような「ば、僕と友達に成ってください」みたいな！

あ、アリですね！

決心した私は彼女にむけて言葉を発します。

急に振り向いた私に、驚いたような怪訝そうな表情を浮かべている彼女に。

「私と、友達に成ってくれませんか？」

「好きです、私と、付き合ってもらえませんか？」

あれ、口の調子がおかしいですね？

—ログアウト—

じゅうさんわー 時間が来た私とビクビク少女と友達（後書き）

ハアハア、クールにかけたかな？

え、かけてない？

そうですよね。

じゅうよんわー 私と僕と店長と（前書き）

やっ
と合流です。

じゅうよんわー 私と僕と店長と

いやー、相変わらず、私の嫁は可愛いな。

と、いまだに薄れぬ出会いの記憶を思い出しながら、アレクセイの街を歩いていく私。

オープン初日のため、うざったい人ごみに辟易としながらも、頭の中はばら色だ……。

そんな妄想に浸りながら、軽く鼻歌を歌いながら歩いていると、なぜか前方の人ごみがこちらにむけて割れて行く。

そして、威圧された様子も無いのに、なぜか一步ひいてしまった人ごみの先。

約十メートルほどの人がいない歩行空間を。

青い魔法使いの格好をした、なぜかいつもしているめがねを外している、絶世の美少女と。

彼女に手をひかれて楽しそうに歩いている、銀糸の少女の姿がそこにあった！

その光景は、今にも膝をついてしまいそうなほど幻想的な光景だった。

「もはや、あの顔は凶器だね……」

そう、独り言を呟くと、私は彼女達に向かって歩き出した。

店長と一緒に歩いていると、なぜか人ごみが割れて行く。

不思議だ？

まさか、僕、ロリコンと思われているのかな？

軽く、ショックだ！

と、手をつないでいる店長を見下ろす。

「どうかしたのか、ふうか？ 飴でもくれるのか？」

前半、不思議そうな顔、後半、期待に満ちた目できらきらと見られ
たら、僕には対抗するすべはありません店長……。

仕方が無い、これは、餌付けじゃないぞ、可愛い物をめでているだ
けだ。

つまり、正義だ！

の信念の元、僕はぺろぺろキャンデーを取り出すと、優しく店長の
口元に添えてあげた。

「はい、あ〜〜ん」

「へ？これ。店長なのか？」

と、そこでみことの芝居が崩れた、流石にいつもあったいた、店長の正体が初等部の子供だったことに、驚きを隠せないようだ。

「ほわゝゝゝ！は、なんじゃ！みことか。ひさしぶりじゃの」

トリップから回復して何とか挨拶する、店長。

といっても、その紅葉を見せびらかすように、フヨフヨ振っているだけだが。

可愛い、彼女の手はフニフニだ。

肉球より手触りがいいのだ！店長の手は！

おう、ひさしぶり、と、みことも手をあげてから、僕の方に視線をむけて、

「それで、どこに行くつもりだったんだ？」

と、聞いてきた。

「ああ、店長のペルソナアイテムを買いにね・・・」

見ての通りこれだから、と、店長の頭を優しくなぞる。

やわらかい、さらさらだ、何使ってるんだろう？

「ああ、なるほど、今回の生態情報で素顔さらしちゃってるから、

その予防のためだね」

それだけで、みことは理解してくれたみたいだ。

僕らと同じ方向を向くと、手をとって歩き出す。

店長じゃなくて僕のをだけど．．．

なぜ？

「なぜ、僕の手を？」

握っているのですか？

「ふむ、愚問だね。好きな人の手握って何が悪い！

それに、今、ふうかはペルソナアイテムを店長に貸しているだろう

悪い、虫が酔ってこないようにね」

と、みことは軽くこちらを一瞥してウインクしてきた。

むー、だから、恥ずかしいから、直接的な表現をやめてくれっ
つとも言ってるのに。

僕の頬はきつと、どうしようもなく真っ赤だろうな．．．。

と、悩んでいたから。

「まあ、ふうかの素顔は綺麗過ぎて、逆に人がよってこないだろう

けどね．．
」

その後、みことが言った言葉は、よく聞き取れなかった。

じゅうよんわー 私と僕と店長と（後書き）

あけおめ！！！

ネカマな僕とおそろいの髪留め（前書き）

ペルソナアイテム決定。

めがねも気に入っているのですのうつけますが。

ネカマな僕とおそろいの髪留め

まるで、どこぞかの黄海のように割れていく人の波を抜けて、僕達はアクセサリーショップ「ラグランジェル」に到着した。

カランカランと、お馴染みの音を鳴らして扉を開けると、さすがオープンだ。

店内は見たことが無いほど、人でごった返していた。

まあ、比率としては男一女九といったところだろうか。

女の子だというところもあるのだろうが、男、特に戦士職はフルフェイスなどの防具が多いのがその原因だろう。

「それで？店長のペルソナアイテムどんなのにする？」

とりあえず、左手の店長に聞いてみる。

それでも一応初等部、立派なレディだ！

「めんどくさいから、ふうか達を選んだ物でいいのじゃ」

うちの学校じゃ無ければな・・・。

そもそも、学校規模で廃人が生産されているうちらが、初等部とはいえまともな判断能力を持っていると思うのが間違いなのだ！

ところで、僕はさっきから誰に熱く語っているんだ？

「まあ、妥当なところで刺青か、めがねか仮面、かな？」

でも、店長日本人離れした顔してるし、眼帯とかも似合うかな？」

とりあえず、店長はぺろぺろキャンディで動けなくして放置。

みことに話を振ってみる。

「そうだな．．．」

あ、花形の眼帯とか可愛いかな？」

ふむ、このまま行くと眼帯の線で決まりそうだな。

「店長だから、向日葵とか？」

．．．でも、バラとかでも案外似合う気もするし」

ふむ、なんとなくイメージ湧かないな．．．。

顔が隠せればいいわけだし、眼帯じゃ無くても眼帯風に包帯を巻いたりでもいいんだよな。

巻く．．．？

巻ければ包帯じゃ無くてもいいか．．．？

そういえば、仮面ってどうやって認識障害を付加してんだ？

刺青なんてもろ晒しているのもあるよな？

って、ことはあのマーク自体に認識障害システムが付加されているなら・・・。

「そうだ・・・！」

「おおう？」

「ど、どうしたのじゃ？」

と、驚いている二人を無視して、近くにあった小さめのリボンをつ取る。

そして、店員に近づいて。

「ねえ、これにも認識障害をかけることできるかな？」

と、聞いてみた。

「ああ、できますよ！少し高く成りますけど！」

ただ、憧れの先輩の素顔が見れたので半額にしときますよ！」

と、元気に答えてくれた・・・。

って、あ、めがねまだ店長がかけたままだった・・・。

結果報告。

店長の前髪を一房縛っているだけ！

結果を言えばリボンである必要性も感じなかったので、銀輪の髪留めに認識障害のマークを刻んでもらい店長の髪に装着！

こうして、可愛い店長の顔を一切隠すことなく、世間に晒さない配慮ができて僕は大変満足です！

ちなみに、それならばと、三人で同じモノを購入して色違いの髪留めをつけた三人組が出来上がりましたとさ。

もちろん、色は青と白なのはいうまでも無いよね！

ネカマな僕とおそろいの髪留め（後書き）

まったりまったり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5202z/>

ネカマな僕とかっこよすぎる彼氏な彼女

2012年1月9日20時51分発行